陽乃

萌奈

瑠海

【プロローグ】

姦(かしま)しい。

女というのはどうして群れるとこうも騒がしくなるのか？

部屋の中だろうが、街中だろうがお構いなしだ。耳障りな甲高い声が響いて脳が痛い。

彼は侵入者たちに対して苛立っていた。

竿留剛毅(さおとめごうき)。

彼は女性が苦手どころか憎しみに近い感情を抱いていた。

それはなぜか？

『もうママは帰ってこない』

幼少時代、母親が若い男と駆け落ちした。

無感情に言い放った父親の言葉。

剛毅(ごうき)少年が大好物だったホットケーキを焼いてくれる約束は果たされないことを知り、もう二度と自分が安心できる温もりに触れることができなくなったことに絶望した。

少し広くなった家の中で感じた寂しさは今も心に影を落とす。

姦(かしま)しい。

「キャハハハ！　あんたみたいなのとあたしが付き合うわけないじゃん♪　身の程を知りなよバーカ！』

中学時代、好意を寄せていた女子に酷い振られ方をした。

彼女は自分を虐めていた不良と付き合っていたようだ。偽の告白を受ける場面を撮影、それを拡散され、学校中の笑い者にされたことで彼の尊厳は踏みにじられた。

彼女の嘲笑が耳にこびりついて離れない。

騙された悔しさは今も心に影を落とす。

姦(かしま)しい。

高校時代、バイト先のメンヘラ先輩女の嘘のせいでクビになった。

『私ばかり働かせて、こいつはろくに仕事もしないんです！』

実際は真逆で仕事中遊んでばかりいる彼女の分まで剛毅が頑張っていた。彼が後輩の分際で生意気にも注意したからメンヘラ女は店長に虚偽の報告をして陥れたわけだ。

誰も彼の言い分を聞かず、少しばかり容姿の優れた被害妄想の激しいメンヘラ女の虚言ばかりが聞き入れられた。

あの不条理に対する嘆きは今も心に影を落とす。

姦(かしま)しい。

『無理矢理部屋にあがってきて、助けを呼ぼうと思っていたの』

大学時代、飲み会でいい感じになった女性は彼氏持ちだった。
彼氏と遭遇した修羅場で女が放った身勝手で冷酷な言葉。
あの瞬間の女の後ろめたいような、突き放したような、あの瞳は一生忘れられない。
不法侵入してきたストーカー扱いされた上に、彼氏から顔が腫れあがるほどの暴行を受けた。
癒しがたい悲しさが今も心に影を落とす。

姦(かしま)しい。

理不尽によって生み出された影が幾重にも重なり、剛毅(ごうき)の精神を漆黒に染め上げた。
しかし元々お人好しだった彼は、進んで女性を害そうという考えはない。可能な限り女性と関わらないように、自分の世界に閉じこもってしまったのだ。
大学を辞め、働きもせずに家の中に閉じこもる日々。外聞は悪いかもしれないが、平穏な暮らしは剛毅の精神を少しずつだが安定させた。

しかし、そんな暮らしも長くは続かなかった。

父親が再婚してできた新しい家族、義母とその連れ子である二人の姉妹のせいだ。

心の準備ができていれば、状況は少し違ったかもしれない。

父親が彼に何の相談もせずに籍を入れて、あろうことか同居まで勝手に決めてしまったおかげでそれも叶わなかった。

「姦(かしま)しい……」

自室にこもってモニターを眺めていた剛毅(ごうき)が独り言ちる。

新しい家族との同居をいきなり宣言された剛毅は、慌てて家のあらゆるところ、それぞれのプライバシー空間、浴室やトイレ以外に監視カメラを仕掛けた。

何か起きた時の自衛のためだ。

例えば、私物の紛失や盗難があれば、ずっと家に引きこもっている彼が疑われるのは目に見えている。今までの経験上、自分が疑われやすく、信用されないのを理解しているための悲しい手段である。

「何で自分の家で肩身の狭い思いをしなければならないんだ……」

モニターはリビングで談笑する女たちを映していた。

この中に彼が入ることは決してない。変な空気になるのはわかりきっていたからだ。

理不尽な疎外感が彼を余計に鬱屈とさせていた。

「剛毅さんのことなんだけど……」

会話の中に自分の名前が登場して、心臓の鼓動が早くなる。何かやらかしたわけではないが、ぼんやり眺めているだけだったモニターを注視した。

「同居してからもう一ヶ月になるけど……なかなか打ち解けられないわ。どうしたらいいと思う？」

剛毅のことを心配して相談を持ちかけたのは、義母の陽乃（はるの）だ。

穏やかで優しい性格だが、少々押しに弱いところがある。

十数年前に前夫と死別して以来、女手一つで二人の娘を育ててきた。

成人した娘がいるとは思えないほど若々しい容姿。

それでいて熟れた色香を纏った豊満なプロポーション。バストは１００センチの大台を超えている。

控えめな性格と真っ向から対立するように主張が激しい爆乳は、男の理性を狂わせる。

ちなみに剛毅は、ひそかに『シナリオ途中で死ぬギャルゲーのヒロインの母親みたいなおっぱい』と評していた。

彼女のことは嫌いではないが、距離感がわからないというのが本音だった。

いきなり母親と言われても戸惑うばかりだ。それは彼女も同様なようで、会話の糸口すら見つからないのが現状だ。

このあたりは二人の問題というよりは、事前にまともな紹介もなく同居を始めた父親の責任が大きい。

「とりま、みんなでバーベキュー行く？　ていうか行きたい☆」

「んん？　萌奈（もえな）ちゃん……何でバーベキュー、なの？」

「いいじゃん☆　バーベキュー行こう。バーベキューは全てを解決するよ！」

謎のバーベキュー推し発言をしているのは義妹の萌奈(もえな)。

彼女は派手な見た目の金髪ギャルで、読者モデルの経験もあるお洒落な美少女だ。ただネイルにはあまり興味がないのか、爪はシンプルにしていた。

陽乃(はるの)の遺伝か、彼女もかなりの巨乳の持ち主である。さらに露出度の高い服装を好むため、色々と刺激が強い。

人懐っこい性格で、剛毅に対しても物怖じせずに、話しかけてくる。

だが距離感がやたらと近く、考えなしにパーソナルスペースに侵入してくるため、剛毅は彼女のことが苦手だった。

『とりまバーベキュー』発言からもわかる通り、ノリが軽くて、いまいち思慮に欠ける。

そのため剛毅はひそかに『必要な栄養を全て身体に奪われたギャルおっぱい』と評していた。

（肉が食いたきゃ焼肉屋でいいだろ。何でわざわざ外で食うんだ？）

インドア派の剛毅としてはバーベキューだけはごめん被りたかった。

夏場のクソ暑い中で火を起こして肉を焼くなんて苦行でしかない。後片付けだって面倒なのだ。

「萌奈が行きたいだけでしょ？　お肉が食べたければ焼肉屋でいいじゃない。何でわざわざ外で食べるのよ？」

剛毅の心中と全く同じセリフを吐き捨てたのは義姉の瑠海（るみ）である。

ゆるくウェーブのかかったセミショートヘアが、理知的でクールな美貌を持つ彼女とよく似合っていた。

彼女の性格は妹とは正反対だ。

その場のノリと勢いで行動して、人懐っこい萌奈に対し、瑠海は物事をよく考えてから行動するタイプで、どちらかと言えば近寄りがたい、冷たい雰囲気の美女である。

いきなりの同居生活に関しても、かなり反対していた。

年齢が少し離れているとはいえ、同じ母親からこうも性格の違う娘が育つのか不思議だったが、プロポーションはよく似ていた。

すらっとした１７０近い長身に、母親から因子を受け継いだ爆乳。

真面目な性格の彼女は、地味な服装を好んでいたが、それでもＨカップのボリュームを隠しき

ることはできなかった。

「母さんには悪いけど、無理して打ち解ける必要があるのかしら？　あいつもいい歳の大人なんだし、放っておけばいいじゃない。仕事もしないで引きこもっている、社会に何ら貢献しないニートをこれ以上甘やかすことないわよ」

（相変わらずムカつく言い草だが、放っておいてほしいのは確かだ）

ある意味で彼女とは最も意見が合うのだが、相性はかなり悪い。

彼女は初対面から敵意を剥き出しだったからだ。

これは瑠海（るみ）が育ってきた環境に起因する。

父親と死別し、女手ひとつで必死に自分たち姉妹を育ててくれた陽乃のために、瑠海は遊ぶ間も惜しんで、ひたすら勉学に勤しんだ。

そして彼女は見事に国立大学を卒業し、一流企業に就職した。

全ては母親のため、これから自分が楽をさせてやろうと意気込んでいた矢先に、母親が再婚。

それだけならまだよかったが、再婚した先には就職に失敗して引きこもるニートがいた。

瑠海からすると、親のすねをかじって、何の努力もせず、何不自由なく暮らす彼は害悪でしかなく、とても家族とは思えない。

剛毅にも事情はあるのだが、彼女は知る由もないし、知ろうとも思わなかった。

そんなわけで剛毅の中で瑠海は『敵性おっぱい』と評されている。

「……出て行ってくれればいいのに」

「瑠海ちゃん……！　そんなこと言わないで……っ！」

「でも、あいつが居なければ、母さんが悩む必要なんかないのよ」

（冗談じゃない……！　何を言い出すんだこの女は！）

瑠海の発言に剛毅は机を思いっきり叩いた。

これだから女は碌でもない。

後から入ってきたくせに、我が物顔で元々居た住人を追い出そうとするなんてとんでもないことだ。

今までの女性に対するトラウマが甦り、怒りで身体の震えが止まらない。

「……そういえば、萌奈。前に下着がなくなったって言ってたわよね？」
「え……うん。でもそれは見つかったよ」
「どこにあったの？」
「洗濯かごの下だけど……」
「それってずっとそこにあったのかしら……？」
瑠海の言わんとすることが見えてきて、剛毅の顔は青ざめた。陽乃や萌奈はいまいちピンとこないらしく、しきりに首を傾げている。
「下着は一人で探したの？」
「そうだけど……あっ、おにぃが洗濯機の周りとか、ちゃんと探したのか聞いてくれて、それで見つかったんだ」
萌奈は剛毅が親切にしてくれたという意味で、彼の名前を出したのだが、瑠海は予想が当たったとばかりの表情を浮かべた。
「それ、あいつが隠したからじゃないの？　それならすぐに見つけられるわよね」

嫌な予感が的中して、剛毅は虚空を見つめて頭を抱えた。

（ふざけんなっ！　なんで俺がそんなことしなきゃいけないんだ！）

全くの事実無根である。

洗濯物が見つからない場合、洗濯機周りを探すのは当たり前のことだ。

それなのになぜか台所で下着を探していた萌奈に、そうアドバイスするのも当たり前のことである。

「でも、使ったって感じしなかったよ？　精液の匂いとかしなかったし」

「萌奈ちゃん、はしたないですよ……」

萌奈が微妙なフォローを入れる。それよりも会話をした状況を説明してほしかった。

「状況的にあいつが犯人なのは間違いないわ……」

瑠海の中で、すでに犯人は剛毅と確定していた。

「んー、別に下着くらいよくない？　減るもんじゃないし、使わせてあげればいいじゃん☆」

萌奈がまた微妙なフォローを入れる。しかも地味に犯人扱いに移行している。

「やめてよ、気持ち悪い。母さんたちをこんなところに置いておけないわ。このままじゃ、私も安心して一人暮らしできない」

「瑠海ちゃん、落ち着きましょう。いきなり犯人扱いはよくないわ」

「お母さんはもう少し危機感持ってよ。ちゃんと、あの人に……お義父さんに相談してっ」

「そんな……あの人、自分の息子が下着を盗んだなんて知ったら……悲しむわ」

ついに陽乃まで剛毅を犯人扱いしている。

この短時間に事実に基づいた冷静な話し合いは全く行われず、状況証拠という名の、瑠海の被害妄想から発生した『お気持ち』が優先されて、彼女たちの中で真実と化してしまった。

おそらく剛毅が犯人ではないという証拠を提示しても、彼女たちの真実が覆ることはないだろう。

この状況をモニターしていた彼は怒りよりも恐怖の感情が強くなっていた。

『事実が必ずしも真実に辿り着くとは限らない……』

自称名探偵だった亡き祖父の言葉を思い出す。

このままでは、また陥れられてしまう。

このままでは、また影が増える。

引き出しの奥に仕舞い込んだ古い鍵を取り出した。

『お前には才能がある』

祖父が遺したのは物ではなく、権利である。最先端の諜報アイテムを使用する権利。

父には秘密で、祖父が剛毅に遺したこの鍵はいわば会員証だ。

『だがお前は優しい……できればこれを使ってほしくはない。まともではいられなくなるからな』

誰が始めたかわからない。

何十年も、下手をすれば百年以上も前から存在する『探偵クラブ』。あくまで剛毅の祖父がそう呼んでいただけで、組織の真の名称は誰も知らない。

なぜ最先端の諜報アイテムを供与するのか目的もわからない。

ちなみに現在家中に仕掛けた監視カメラやモニターは、祖父が亡くなった頃のものだが、それだってずいぶん高性能な代物だ。

『どうしても、どうにもならなくなった時に使うんだ』

第三者から見たら、些細なことかもしれなかった。こんなことで怪しげな組織に接触するなんてバカげているかもしれない。

しかし、唯一の生存圏を失われようとしている剛毅にとっては藁をも掴む思いである。

環境を変えるためには力が必要だ。

正式に祖父の遺産を受け継いだ剛毅は、自分の生存圏を、自分の世界を守るためにある計画を発動した。

『リ・ホーム』計画。

供与された諜報アイテムをフル活用し、自分を追い出そうとする雌たちの弱みを握り、逆に追い出すか、意のままに支配する。

家中の監視網をプライベート空間にまで拡大し、強化。さらに衣類やバッグにも超小型の盗聴器を仕掛け、外出時にも追跡調査が可能になった。

雌たちの真実は全て彼が塗り替える。

彼のために家族は生まれ変わらなければならない。

【第一話　義母堕つ】

最初に監視網に恥部を曝け出したのは義母の陽乃(はるの)だった。

仕事で帰りが遅い夫のいない夫婦の寝室。

普段のおっとりした彼女からは想像できないスケスケのエロランジェリーを身に着け、自らの姿をスマホのカメラに収めている。

成人した娘がいるとは思えない若々しさと、人妻特有の妖艶さを併せ持つ肢体を、これでもかと見せつけるようにポージングする様子は、モニター越しに見ていた彼に、憎しみを一時的に忘れさせ、欲望の解消を優先させるほどであった。

（しかし一体何のために自撮りしてるんだ？）

欲望の迸りをティッシュで拭き取りながら、冷静になった頭で思考を巡らせる。

一番初めに思い浮かんだのは毎晩仕事で遅い夫に送るためという理由だ。
しかし、剛毅（ごうき）が知る限りあの堅物がそんなことを望むとは思えなかった。
二番目は純粋に自分のためだ。
筋トレ好きには多いが、自分の研鑽の結果を記録に残している説。
毎日のジョギングや体操など、彼女は美容と健康に気を遣っているため、あり得ない理由ではない。
その場合、なぜセクシーなポーズをするのかは謎だった。
一番目と二番目の理由では弱みとしては若干微妙である。
三番目に思いついた『浮気相手に送っている説』が剛毅としては望ましい。
ただ、これも可能性は薄かった。
陽乃が長い時間家を空けることは滅多にないし、真面目な瑠海（るみ）が母親を尊敬している様子から、男癖が悪いということもなさそうだ。
女性という生き物に心底絶望しているとはいえ、剛毅にもそのくらいの判断はできた。

（ん？　あれは……）

高解像度カメラが捉えた陽乃のスマホ画面を見て剛毅は口元を歪めた。

「ククク……そうだよなぁ！　やはり女なんて碌なもんじゃない……！」

陽乃が開いたアプリは巷で流行っている画像や動画を投稿できるＳＮＳだ。

彼女はそこに自撮り写真を投稿していた。いわゆる『裏垢』というものだ。

これだけでも弱みとしては充分な成果と言える。

（もうちょっと欲しいな……絶対に逃げられないような何か……）

状況をウォッチするためにフォローした陽乃の裏垢のタイムラインを眺める。

半脱ぎや下着姿で様々な角度から撮影された、欲求不満が具現化したようなエロ自撮り。画面越しに漏れ出した人妻の色香に群がるコメント欄。愚物どものイカれたコミュニケーションを心底軽蔑し切った目で眺めながら、剛毅は一つの妙案を思いついた。

「鳴かぬなら鳴かせてみせようってな……ダメもとでやってみるか」

愚物連中も捨てたものじゃない。当て馬として大いに役に立ってくれる。

こうして、剛毅の陽乃攻略戦はスタートした。

作戦は剛毅(ごうき)が想定した以上にスムーズかつスピーディーに進み、わずか十日そこらで目標を達成できた。

あまりにも上手く行きすぎて、もっと時間を要するだろうと考えていた剛毅としては、嬉しさよりも不安のほうが大きいくらいだった。

（いくらなんでもちょろすぎないか？）

剛毅の作戦は単純なもので、陽乃(はるの)の裏垢である『天音(あまね)』に会う約束を取り付けるというものだ。

複数のアカウントを用意し、陽乃の好みに合いそうな男を演じてやり取りをした。

コメント欄に群がっていたヤリ目オーラ全開の愚物どもとは真逆に、あくまで普通に、紳士的にアプローチする。

いくらエロ自撮りを投稿している女性とはいえ、いきなり「ヤリたいです。会いましょう」ではあまりにも直接的過ぎて引いてしまうだろう。

もちろんそれが良いという女性もいるかもしれないが、陽乃は違った。『天音』がガツガツしたコメント欄を相手にしていなかった様子から察することができた。

そして三つのアカウントが『天音』とメッセージのやり取りができるところまで行き、そのうち一つのアカウントが『天音』と会う約束を取り付けることに成功したのだ。

地方在住の会社員の『ミチル』。

年齢は二十代で恋人なし。少し初心(うぶ)な性格という設定だ。

趣味のやり取りから始まったのが、家庭の悩み相談にまで至り、『天音』は短期間で『ミチル』のことをすっかり信頼した。陽乃の情報アドバンテージがあったことに加え、悩みの種である剛毅のことに対するアドバイスが的確であったことが功を奏した。

もちろん自作自演のマッチポンプである。

そして決め手となったのはこんなやり取りだ。

『いつも僕ばかり見せてもらっているので、ちょっと恥ずかしいですけど僕のアレも見ますか？』

『はしたないかもしれませんが興味はあります』

そうしてたくましく勃起した肉棒の写真を送られたことで興奮したのか、その後はどういう風に抱かれたい、ここを責められると感じる、などのエロトークに発展した。

こうなれば勢い任せで、今度都内に出張するので会えないかと訊ねると、『天音』はすぐには返事をせず保留した。

保留した理由は夫への罪悪感ではなく、家を空けることを勘ぐられるのを恐れているからだと、剛毅にはすぐにわかった。

だから剛毅は『ミチル』が会いたいと提案した日に、朝から夜遅くまで出かけるという嘘を伝えた。

それを聞いた時、陽乃の様子は普段通りに見えたが、ものの三分もしないうちに『天音』から『ミチル』に承諾のメッセージが届いたので思わず苦笑いしてしまった。

あまりにも上手く行きすぎて、何か落とし穴があるのではないかと不安に駆られる剛毅であったが、待ち合わせ場所の駅前でそわそわしている陽乃の姿を見つけるとその考えは変わった。

落とし穴があっても埋めればいい。

穴を埋める道具を熱くしつつ、剛毅は目の前の穴に声をかける。

「ご、剛毅さん……！？」

陽乃は予期せぬ義理の息子の登場に、動揺を隠せないでいた。顔面蒼白の状態でスマホをギュッと握りしめたまま、固まってしまっている。

「ど、どうしてここに……？」

「友達と待ち合わせですよ。陽乃さんもですか？」

「えっ、ええ……そうなんです。剛毅さんが出かけた後に誘われて……その、でも、たった今、場所を変えたいって連絡があったんです！」

剛毅の表情を窺いながら、猛スピードでスマホの画面をタップしている。おっとりした性格の陽乃の指がスピーディーに動いているのが愉快だった。

そして指が止まった直後に剛毅のスマホがメッセージを受信した電子音を奏でた。

「え？」

「……ひどいな陽乃さん。義理の息子と出くわすのがトラブルだなんて」

『すみませんトラブルでまちあわせばしょへんこうくだそい』

句読点も改行もなく、文字変換もせず、誤字脱字が酷い文章。

送信者が相当慌てていたのを充分に表現している。

剛毅のスマホの画面を見せられて陽乃は混乱の極致に達していた。『ミチル』に送ったはずのメッセージが剛毅に届いているのだから当然だ。

足元から崩れ落ちそうになるのを柱にもたれかかって何とか堪える。

「え、なんで、わたし、まちがえ……てない……のに、どうして……？　へ？」

「こんにちは、『天音（あまね）』さん。『ミチル』です♪」

自分史上最も明るいスマイルで剛毅は『天音』に挨拶した。

彼女がずっと見たがっていた家族の笑顔を、自分にとって最悪の瞬間に見せられたのは皮肉としか言いようがない。

「ここじゃ目立っちゃいますから、静かなところに行きましょうか？　『天音』さんも騒ぎは困るでしょう？」

今まで『ミチル』とやり取りしていた画面をスワイプして見せながら囁（ささや）く。

周囲の視線が異常に気になりだした陽乃は口を噤んで頷くと、剛毅と共に駅前を離れ、白昼のラブホ街へ足を向けた。

「ちょ、ちょっと待ってください剛毅さん……！　なんで脱いでるんですか！？」

室内に入るなり、服を脱ぎ始めた義理の息子に抗議の声をあげる。

「いや時間もったいないし、『天音（あまね）』さんも遅くなると困るでしょ？」

「『天音』さんはやめてください！」

「良い名前だと思いますよ」

「そうじゃなくて……その、あなた……わたしを騙したんですか？」

「はい、そうなりますね」

あっけらかんと言ってのける剛毅に対し、悲しそうに顔を俯かせる陽乃（はるの）。

「そんなあっさりと……酷いです。こんな、人を陥れるようなことをするなんて……」

「でもホイホイ誘いに乗って、オフパコの約束を承諾したのは陽乃さん自身ですよね？」
「お、オフパコだなんて！　わたし……そんなつもりはありませんでした……」
「こういうやり取りの後に、それは通用しませんよ」
メッセージの記録は事実を示すだけで、真実を明らかにするものではない。
陽乃が何と言おうが騙されたと証明をするのは困難だったし、第三者から見れば不貞（ふてい）の証拠と取られる内容だった。
「あなたは親父を裏切った」
「それは違いま……きゃぁっ！」
言葉を遮るには充分な威圧感。
剛毅のたくましく勃起した肉棒を目の前にして、陽乃は生唾を飲み込んだ。
あの日送られてきた写真と同じか、それ以上に長く、太く、硬そうな肉棒。
彼女は騙されてばかりではなかった。
娘たちには、人と話す時は相手の目をしっかり見て話すことを教育してきた陽乃だったが、目

の前の雄が放つ強烈な存在感に、どうしても目をちらつかせてしまう。
「それは……わたしもいけなかったけど、こういうことはやっぱり……」
「ほら、陽乃さんも早く脱いでくださいよ。あっ、脱がされるほうが好きなんでしたっけ？」
「ま、待って……！　脱ぎますから！」
両手をワキワキしながら近づいてくる剛毅を制す。
躊躇いながらも一枚、また一枚と衣服を脱いでいく。
成人した子供がいるとは思えない美貌を誇る義母のストリップショーに、剛毅は肉棒が滾るのを感じていた。
「ヒュー♪　写真で見るよりずっと綺麗ですね。それに下着も気合充分じゃないですか？　そんなつもりないなんて言っておいてヤル気満々ですね～」
「そ、そんなことはありません！　からかうのはやめてください。こんなおばさんの身体……」
「いやいや謙遜はいいですよ。自分でもわかってるでしょ？　男が悦ぶエロい身体してるんだって」

うっすらと透けた黒のセクシーランジェリーに包まれた肉感的な艶熟（えんじゅく）ボディ。身じろぎするたびにたゆんたゆんと長乳が震える。腰のラインはとても経産婦（けいさんぷ）とは思えないくらい引き締まっており魅力的だ。

どこに出しても恥ずかしくないというよりも、どこかに出して誇りたくなるような肉体である。

「そんなこと……」

「ないと思ってるならあんなとこに投稿しないでしょう？　陽乃さんは見てほしいんですよ。自分のエロい身体を！」

「ち、違います！　わたし、寂しくて……それで誰かに構ってほしくて……それで……」

「……まあ、いいですよ。とりあえずしゃぶってください。陽乃さんのエロい身体で興奮した勃起ちんぽを鎮めてくださいよ」

ベッドに腰掛けた剛毅はいきり立った肉棒とスマホを交互に指差して催促する。暗にメッセージを公開されたくなければという脅しを含んでいるのは明白だった。

（一回抜いてしまえば冷静になってくれるかも……）

そんな淡い期待をしつつ、陽乃は義理の息子の股間に跪いた。

眼前に突きつけられた肉棒の熱をもろに感じて雌の部分からドロリとしたものが溶け落ちていく。それを悟られまいと冷静さを装いつつ、陽乃はおずおずと股間に顔を埋めた。

（汗臭い……男の人の濃い臭いで頭クラクラしちゃいます……）

鼻孔を通して吸収した若い男の発する濃厚なフェロモンによって陽乃の脳が震える。ようやく手に入れた安息の地が足場から崩れようとしているにもかかわらず、この状況に興奮を隠しきれないでいた。

（やっぱりすごく大きい……ぶっとい血管が浮いてて、カリもこんなに膨らんで……♡）

薄暗い照明の中で周囲はぼんやりしているのに、肉棒の輪郭だけはハッキリと瞳に映っていた。

（わたしの身体でこんなになってるんですよね……お汁が先っぽから滲んでいます……♡）

濡れた先端部に唇をそっと近づける。心臓の鼓動が速くなり、内側から十数年分の忍耐が剥がれていく。

（はあぁ……っ♡　おちんぽ熱い……♡）

勃起した肉棒が粘膜に触れた途端、陽乃の理性の泉は焼石を放り込んだように一気に蒸発した。

フェラチオ奉仕をするのは今は亡き前夫にして以来だった。剛毅の父である今の夫はセックスに対しては淡白で、彼女が満足するようなセックスはしてくれない。

誠実な男であるがゆえに、性格は褒めてくれても、性的な魅力について口にすることはなかった。

だからこそ欲求を満たすために裏垢を作って自らのエロい身体を晒した。

だからこそ唆（そそのか）されたとはいえ若い男と会う約束をしてしまった。

だからこそ義理の息子の命令に従って肉棒をしゃぶっている。

（エッチなカタチ……本物のおちんぽ♡　義理とはいえ、息子のなのに……♡　だめなのに……許されないのに……こんなにわたし、興奮してる……♡）

脅迫されている状況にも関わらず、陽乃の奉仕は丁寧かつ、ねっとりしたものだった。

前夫が死んでから溜まっていた欲求を抑えることができなかったのだ。

唾液をたっぷり含んでとろとろになった口内で、パンパン膨らんだカリに舌を丹念に絡ませる。

頬を下品にへこませて、精一杯唇を吸いつけて、頭を前後に振るたび、部屋中にいやらしいバキューム音が響き渡った。

（先走りのお汁がドンドン溢れてきます♡　男の人の臭いが口いっぱいに拡がって……♡　おちんぽで頭がどうにかなってしまいそうっ♡）

「じゅぽじゅぽ♡　ぐっぷぐっぷ♡　ぢゅぞぞぉ～～～っ♡」

（何かやたらノリノリじゃないか？　罠か？　罠なのか？）

もう少し躊躇するかと思っていたのに、陽乃があまりに従順で熱心に奉仕するものだから、剛毅はまたもや妙な不安に駆られていた。

確かに『ミチル』としてのやり取りから、陽乃がかなり欲求不満であることは理解していたが、義理の息子に脅迫されている状況で、いくらなんでも順応性が高過ぎる。

命じたわけでもないのに根元までの肉棒を咥え込んで、胸元まで唾液で汚している様子に困惑しながらも、想像以上の快楽に剛毅の下半身は昂ぶり続けていた。

（このまま出してしまってもいいけど……）

唾液に塗れた谷間が暗めの灯りに照らされて艶めかしい。衣服の上からでも隠しきれていなかった陽乃の爆乳が布一枚の状態だ。それらが弾むたびに高まる雄のリビドー。

「陽乃さん、いったんストップ……！」

「んふはぁっ……え……？」

頭を抑えてどうにか奉仕を中断させる。

陽乃の表情にはそこはかとなく名残惜しさが混じっていた。

ようやく運ばれてきたごちそうが前触れもなく下げられてしまったとでもいうような微妙な表情。

「ははっ、夢中になってるとこ悪かったですね」

「そ、そんなことありません……早く終わらせたいだけです……！」

口ではいくら否定しても、陽乃が発情しているのは明らかだった。彼女自身も抑えきれない気持ちを自覚してはいたが、辛うじて残った理性が否定の言葉を紡いだ。

「はいはい。じゃあ、次はそのデカパイでお願いしますよ」

「きゃっ……わ、わかりましたから……」

Ｉ字の谷間を肉棒でペチペチ叩いてやると、陽乃は黙ってブラに手をかける。

ホックを外す音が爆弾の安全装置を解除したような危険を感じさせた。

どたぷんっ♡

たかが布一枚の抑えが失われただけのはずなのに、その迫力に空気が震えた。それどころか空間が歪んだ気さえした。

「おもっ」

「きゃ……♡」

下から支えるように持ち上げると手のひらいっぱいに乳果のもちもちした弾力と確かな重量を感じた。片方だけでも１キロ以上はありそうだ。

「さすがＪカップ」

「い、言わないでください……あふっ♡」

「おおっ、めっちゃ沈む……」

童心に返ったように目を輝かせながら、剛毅はバスト１００センチ超のおっぱいを弄ぶ。むちむちの乳肉に指を沈め、夢中になって捏ねくり回した。

年齢不相応に瑞々しい乳房は、変幻自在にカタチを変えながら、骨太の指に吸い付いて離れない。

まさに魔性の乳だ。

「おっ、すごっ……ほぉ……」

いちいち感嘆の声を漏らしながら揉みしだき続ける。何らかのエネルギーが生み出せそうなほど熱心に、熱烈に、骨太な指は別の生き物のようにおっぱいの上を縦横無尽に這い回り、無限の軌跡を描いていた。

「はぁ♡　はっ、はっ……あっ♡　んっ♡　あ、あの、わたしがするんです……よね？　んんっ♡　ふぅ、ふぅ……そ、んな……そんなに、いやらしく揉まれたら……あぁ♡　はぅっ……♡」

太腿をもぞもぞ擦り合わせながら、陽乃は苦しそうな吐息を漏らした。

こんなに熱狂的におっぱいを揉まれたのは久しぶりである。ますます彼女の中の理性が溶けて剥がれていく。

「あぁ、ごめんごめん。ついつい夢中になっちゃいましたよ……」

「じ、じゃあ……その、シますから……」

Ｊカップのエロ爆乳で剛毅の肉棒をむぎゅっと包み込んだ。

カウパーと唾液でドロドロになった肉棒に、スベスベの乳肌が満遍なく吸いついて、爆乳の感触を細胞レベルにまで染み込ませる。

この光景を眺めているだけでつい口元が緩んでしまう。

（ああ……♡　おちんぽ硬い♡　立派なカリがおっぱいに食い込んじゃう……♡）

「くおぉっ……全部埋もれちまった」

かなりの巨根である剛毅の肉棒が隠れてしまうほどの爆乳。

竿の根元から先端部分まで、熟れた柔肉の中に閉じ込めていく。

まだ微動だにしていないのに、その乳圧だけで剛毅の背筋を電流が駆け抜け、腰が浮き上がりそうになった。計画の一環であることが念頭になければそのまま情けなく射精していたかもしれない。

「……ははっ、パイズリのためにあるようなおっぱいですね。もしかして手慣れてます？」

「んっ♡　そんなことありません……」

そう言いながら胸の谷間に唾液を垂らし、左右交互にクロスさせるように乳圧をかけて天然のローションを刷り込んでいく。くちゅりくちゅりといやらしい水音が響くたびに亀頭がおっぱいに埋もれ、海綿体がざわつくのがわかった。

「くっ、すげぇ……じゃないですか……陽乃さんのおっぱい……こんなのすごく……すげぇ……」

軽口を叩いて虚勢を張ろうと試みるがパイズリの快感が凄すぎて、語彙がお粗末になっていた。主導権を握らせまいという意志だけが快楽に敢然と立ち向かっている状態だ。

「はあ♡　はあ♡　はあ♡　はあっ……♡　あぁ……おっきい、です♡　それに、すごく……熱くて……♡　ふあぁ♡　わたしのおっぱいの中で、ぐちゅぐちゅっ、ぐちゅぐちゅって……♡」

もちろん陽乃にも余裕などあるはずもなく、自分のおっぱいの中で脈打つ若い肉棒を気持ち良くする使命感で頭がいっぱいであった。剛毅の一部分以外の状況を把握することなどできるはずがない。

「あぁ……♡　んんっ……ふぅ、あはぁ♡　気持ちいいですか……剛毅さん？　んんっ……わたし、ちゃんとできていますか……？」

「ぐっ！？　ああ……最高ですよ……！　まるでパイズリ専用のおっぱいだ！」

パイズリ専用と評された爆乳を両脇で抱え、乳圧をさらに強めて上下させる。

みっちりと隙間なく蜜と乳に包まれた肉棒からカウパーの涙が流れ続けた。

たぱん、たぱんと爆乳が恥骨を叩く音と、肉棒が擦られる水音が混じり合い、部屋の中で淫靡に弾ける。表面の凹凸すらもはっきりと感じられるほど密着したおかげで、次第に肉棒が膨張してきているのがありありと理解できた。

「はあぁ♡　くっ、ふっ……♡　んんぅ、んふっ♡　むくむく膨らんできました……♡　んくぅ♡　はぁ、ふぅっ♡　も、もう、射精……するんですね……♡」

爆乳の抱擁ホールドがその圧力を増し、限界に近づきつつある肉棒を締め付ける。激しい快感を発生させる高密度のパイズリ穴でシェイクされ、剛毅は肉棒が根こそぎ引き抜かれる錯覚すら感じていた。

「おぉっ♡　おちんぽ……♡　んぉ……♡　おちんぽビクビクって……♡　はぁ、ああ……わた

しのおっぱいに射精させろって……命令しています♡」

唇から淫らな吐息を漏らしながら射精への期待感を隠しきれないでいた。

その証拠に心の中で留めていた『おちんぽ』という下品なワードが音として飛び出してしまっている。

「はあっ♡　おちんぽパンパンです♡　くっ♡　きます……♡　おちんぽ射精きますっ……♡」

「ぐっ……！　おらっ！　ドスケベおっぱいで受け止めろ！」

次の瞬間、下半身が分離して飛んで行った。

そう表現しても差し支えないほど激しい射精だった。

腰がおっぱいに持ち上げられたように宙を浮き、痕が残りそうなほどの勢いで精液を撒き散らす。濃厚な精液は爆乳の中でピンボールのように何度も跳ね返った。

「きゃあっ♡　あはぁ……♡　びゅうびゅう熱いのがぁ……♡　すごいです……♡　射精の勢い……すごい……♡　んくっ♡　ふぅ……ふぅ……ふぅ……♡　おっぱいで……おちんぽが暴れてる……♡」

若い雄の勢いに圧倒される。

巨大な肉棒の脈動が、雌芯から愛蜜を削り溶かす。

おっぱいの中で広がる男の熱と臭いが、思考回路を狂わせる。

（射精すごく長いです♡　こんなに出されたらおっぱい妊娠させられちゃいますね……♡）

彼の変革の狼煙となる射精はとても長く続いた。１００センチオーバーの爆乳をもってしても収まりきらなかった精液が、僅かに谷間から溢れる。

とろんとした表情でその様子を眺めながら、陽乃はいつの間にか自分の股間が熱く湿っていることに気づいた。

「はぁ、はぁ……おっぱいで搾ってくれよ陽乃さん」

「は、はい……わかりました……♡」

脈動が収まりつつある肉棒に、むぎゅむぎゅと再び乳圧をかけて、根元から精液を搾り上げる。

尿道の中に残っていたものも、漏らさず爆乳に塗りたくられていく。

「ほら、精液まみれのドスケベおっぱい拡げて見せてくださいよ」

少し嘲るような彼の指示に従い、陽乃は抱きかかえていたおっぱいの拘束を解放する。
真っ白な長乳の間に、品質のいいチーズがとろけたような汚濁の梯子が架かっていた。
配偶者以外に犯された人妻の爆乳。たった一回の射精で完全に所有者が変わってしまった。マーキングされたことを示すように精液の滑りでテカテカになったおっぱいはいやらしく輝いている。
（結構ヤバかったな……）
痺れるような快感に身を震わせながらも、一発抜いたことで少し冷静になった剛毅。
主導権を握られなかったことに安堵しつつ、陽乃の様子がおかしいことを見逃さなかった。
「きゃあ……！」
乳房を精液まみれにされて呆けている陽乃をベッドに引きずり込む。
「あっ、やっ♡　剛毅さん……だめで、す……これ以上は……んむっ……！？」
ささやかな抵抗を試みる陽乃を強引に抱き寄せると、潤いたっぷりの唇に舌先を突っ込んだ。
唇を結んで侵入を防ごうとするのをこじ開けて、舌先はもちろん歯茎の隅々まで口内を蹂躙す

る。

最初こそ深くまでかき回していた舌先は抵抗が緩むと彼女の舌先をだんだん外側に引っ張り出すことに成功。そして、とうとう観念した陽乃は自ら舌を絡ませてくるようになった。

「ふはぁ……！　陽乃さんの、ベロチューエロ過ぎ……」

「ちゅっ、れろれろ、むちゅ～……♡　っはあ……こ、これは……違うんです……♡　むぢゅ、ちゅばっ♡」

言葉では否定しながらも、舌先の交わりを中断することをしない陽乃。ディープに蜜唾を絡ませ合ったおかげで、脳がすっかり茹で上がっており、まともな思考ができていなかった。

剛毅に一度射精させて冷静にする目論見は成功したが、彼女自身がこれほどまでに興奮してしまうのは想定外だったのだ。

（娘と変わらない年齢の子と、恋人同士がするようなエッチなキスしちゃってます♡　こんなのやめなきゃいけないのに……♡）

残りカス程度の陽乃の理性が警鐘を鳴らすが、長年抑制されてきた欲望を止めることはできない。

太ももを撫でて、これから下半身を愛撫するサインを出すが、もはや抵抗らしい抵抗はなく、申し訳程度に説得力のない否定の言葉を小さく漏らすのみだ。

ショーツの中に男の指が侵入しても、それは変わることはない。

「ふあぁ♡　やぁっ♡　指が……♡」

「もうかなり濡れてるじゃないですか。パイズリとフェラで興奮しちゃいました？」

「ひうっ♡　はぁ♡　んっ、くふぅ……♡」

もう否定の言葉も出てこない。

剛毅はそれについては触れることはせず、再び唇を重ねて愛撫を続けた。

敏感な部分が傷つかないように優しく、溢れる愛液をクリトリスや淫裂の入り口に塗りたくってやる。ゆっくりと焦らすように、決して中には触れないように指先を蠢かせた。

「ちゅば、れろっ♡　んはぁ♡　くぅ♡　ひっ、やあぁ……♡」

だんだん陽乃の身体から力が抜けて、閉じていた脚が徐々に開いていくのを確認すると中指の先っぽだけを挿入した。

「くひぃ♡　はっ♡　ナカ……♡　あっ♡　はぁ、やっ♡　んはぁ♡　あっ、むぅ♡　ちゅぶ♡　ちゅるる～っ♡」

強めの刺激に一瞬身体を大きく震わせたかと思いきや、積極的に唇を吸いつかせてきた。感じているのを誤魔化すためか、それとも開き直ったのか剛毅にはわからなかったが、指をさらに奥へと沈めていく。

（優しい愛撫……♡　わたし犯されているのに……♡　この指の動き好きなってしまいます……♡）

まだ激しい動きはいらない。

久しぶりの快楽をじっくり味わってもらい、どれだけ欲深いのかを自覚させる。

二本目の指が挿入されるのにもそう時間はかからなかった。

ざらついた感触の部分を指の腹で擦ってやりながら、親指でクリトリスを触れるか触れないか繊細なタッチで刺激する。

最初は恥じらって閉じていた脚は、快楽を求めてすっかり開いてしまっていた。

（このまま……このまま……続けられたら♡　夫以外の男の人の指でわたしイってしまいます……♡）

口内を舌でかき回される音と膣内を指で弄ばれる音が陽乃の頭蓋に反響する。意識は完全に快楽に埋没して、全身を緊張させた。

（イクっ♡　イクっ♡　イクっ♡　イクっ♡　イク～～～……っっっ♡♡♡）

剛毅の舌に唇を強く吸いつかせ、陽乃は絶頂を迎えた。

久しぶりに他人にイかされた衝撃が大き過ぎたのか、足を攣りそうになっていた。

「ふあぁ……♡」

絶頂の余韻に浸っているところで剛毅の唇が離れると、思わず名残惜しそうな吐息を漏らしてしまう。二人の間に引かれた透明な糸も無念そうに空中に消えていった。

「ほら、こっちに尻を突き出して……」

「んっ、ふぁい……♡」

恍惚とした表情を浮かべ、未だ放心状態の陽乃を四つん這いの格好にさせる。

バストに劣らず豊満なヒップからぐしょぐしょに濡れたショーツを引きずり下ろすと、濃密な雌の臭いが溢れ出した。

「めちゃくちゃエロいですよ陽乃さん。想像以上だ……」

「ひやぁ……みないで……みないでください……」

背中越しに剛毅の鼻息がさらに荒くなるのを感じる。小さな袋を破る音とごそごそと何かを着けているのもわかった。

「お、おねがいします……これ以上は、ほんとうに……わたしたち、親子なんですよ……」

陽乃の懇願は無視して欲望の象徴を濡れそぼった淫唇に擦り付ける。

薄いゴムの膜に覆われた亀頭の感触に陽乃の身体に緊張が走った。いよいよ取り返しの付かないところまで来ている。

しかし、陽乃は抵抗するような言動を取りながらも、頭の中では抵抗できない理由を列挙して行動しないことへの言い訳を始めていた。

家族の事とか、世間体とか、抵抗できない本当の理由から目をそらし続けていた。

（あの人よりも大きいのが入ってくる……♡）

ゴム越しにも凄まじい熱量がわかる肉棒がゆっくりと侵入してきた。

丁寧な愛撫のおかげでよくほぐれてはいたものの、受け入れたことのない質量の肉棒に対して、膣肉は押し返そうと反発してくる。

「子供二人も産んだ割にはいい締まりじゃないですか……！」

肉感たっぷりのムチムチヒップを大胆に掴んで、最奥に先端部をグイッと押し付けた。

「んふあおぉっ……♡」

子宮から吐き出したような悲鳴を上げて、全身を小刻みに震わせる陽乃。

（おちんぽ挿入しただけなのに……軽くイッてしまいました♡）

上半身を沈め、背中を反らして尻を突きだす格好は、陽乃の淫乱さを体現したようなデカ尻をより淫らに強調した。まるで後ろから激しく犯してくださいと言わんばかりの体勢だ。

意図しない挑発に乗って、剛毅は腰を動かし始めた。

入り口にカリが引っ掛かるくらいまでゆっくり引き抜いて、勢いをつけて膣奥に再突入するの

を何度も繰り返す。

「んおぉっ♡　はおっ♡　あぁ……はぁ、お、おちんぽ……がっ♡　やあっ……♡　うくっ、はおっ♡　んぐっ、ふあぁっ……♡」

一突きがまるで攻城兵器のような破壊力のピストン運動。

清楚な見た目からは想像できなかった下品な喘ぎ声が、言い訳のしようがないほど何度も発せられる。

「あっ♡　はぁ♡　かふっ♡　おっ、ご、これ……はっ、はげしっ……ひぃっ♡　いっあぁ……♡　おぉ、おちんぽ……らべぇ……♡」

「くっ、何て声出してんだ！　親父が聞いたら泣くぞ……！」

腰をぶつけるたびに尻肉が波打ち、膣肉がうねる。腰を引こうとすると肉棒を放すまいと膣全体が吸いついてくる。

「あぁっ♡　かはぁ♡　んんっ……ぐぅ、ふあぁ……♡　ご、こわれ……♡　りゅうぅっ……♡」

一方的に犯されているのに、剛毅のピストン運動に合わせて陽乃は無意識に腰をくねらせていた。結っていた長い髪が解け、反らせた背中で波打つ艶姿（あですがた）が雄の理性を掻き毟る。

想像を遥かに上回るドスケベ具合に剛毅の腰も止まらなくなってきた。

自分の証を雌穴に刻み込むように肉棒が荒れ狂う。オナホ扱いするような容赦のないピストン運動だ。

男と女の制御不能な衝動がぶつかり合い、薄暗い室内にねっとりとした空気が絡みついた。

「いっ……♡　ひっ……イク……♡　イ……ぐっ……♡　んんおっ……♡　あぁふっ♡　ひいっ……んんんんん〜〜〜っっっ……♡♡♡」

「うぐっ……！」

シーツを引きちぎりそうなほど握りしめて、陽乃は全身を激しく痙攣させた。蕩け切った膣壁の震えがコンドーム越しにも伝わり、男の忍耐の栓を破壊する。

尻肉が伸びてしまいそうなほど指を食い込ませて捕まえると、狭まる膣奥に爆発寸前の亀頭を捻じ込んだ。

「おあっ♡　んはあああぁあぁあぁあぁっ……♡」

剛毅の全身が緊張し、欲望の激流が下半身を崩壊させた。薄いゴムの膜を突き破らんばかりの勢いの射精。

年上の女性、義理の母、親父の嫁。カテゴリーは何でもいい。

とにかく他人の女を犯してやったという負の愉悦。

そして長い間、自分自身の中に渦巻いていた女性に対する負の感情。

それらが入り混じって生まれた快楽は戦慄に近い高揚感を彼にもたらしていた。

「……はっ、はっ、はっ、かはっ……へぁ♡　はぁー♡　まら、まだ、へっ、れでる……♡でへますぅ……♡」

ふわふわした意識の中で、馬力のあるエンジンみたいな脈動を内側に感じながら、陽乃はゴムの膜が大きく膨らんでいることに快感と達成感を覚えていた。

「まだだ……」

「んっ♡　ぬけ……へはぁ……♡」

まだ硬い肉棒を引き抜くと、絶頂の余韻で脱力している陽乃の身体を仰向けに寝かせる。

「はあ……♡　ふぅ……♡　こんな、に……♡」

たっぷりと射精して先端が膨らんだコンドームを外し、見せつけるように彼女の目の前でぶらぶらさせる。

恍惚として、これから何をされるかよくわかっていなさそうな表情がそそられた。

「ひゃぅ……♡」

使用済みのコンドームを、雑に彼女の胸元にべしゃっと捨てる。縮んだ蛍光ピンクのゴムからちょろっと飛び出した精液と、付着した愛液で白い肌が汚れた。

相手の尊厳を無視した最低の行い。

これが愛のあるセックスではなく、自分の欲望を満たすための行為だと実感できる。

（ちゃんとわからせなきゃな……）

痴態を曝け出している陽乃にそれとなくスマホのカメラを向けた。

使用済みのコンドームを身体に捨てられても、大した反応もせずにぼんやりしていた陽乃の意

識は微かなシャッター音によって現実に帰還する。

「へっ……？　今、カメラ……？　ひっ、やぁん……♡」

剛毅は無言でコンドームを装着した肉棒を挿入した。イッたばかりの膣内は最初よりも抵抗なくスムーズに彼を受け入れた。

「まぁっ♡　あはぁっ……♡　んんっ♡　くっ……ふっ♡　あっ♡　まっ……まって♡　まっへください……！　すこ、し……やすま……せひゃぁっ……♡」

抗議の声に対しては腰を大きくグラインドさせて黙らせる。

彼女の言葉とは裏腹に膣内は活発に蠢いて、肉棒を休みなく締め付けていた。腰を打ち付けるたびに、爆乳が揺れて乳同士がぶつかって甘く弾ける。

鬼さんこちら、手の鳴るほうに。そんな風に煽られている気さえした。

だから彼はもっと激しく腰を揺らし、スマホの画面をタップしまくって、鬼のようにシャッターを切り続ける。

「ひゃっめ……！　やあっ♡　はっ、んあっ♡　ほっ、くおぉっ……♡　おっ、ほおっ♡　くっ、

こんな、とこ……撮らないで……くら、さい……♡　ひぃあっ♡　はっ、ほあっ……♡　やぁっ、んはあぁあぁぁっ……♡」

シャッターを切るたびに、その音に反応して膣内がきゅんきゅんと締まる。

「撮るたびにやたら締め付けてきて……感じてるのか？」

「やっ、はあっ♡　んそっ♡　そぉ……んなっ、こと……んおおおぉっ♡」

「陽乃さんの裏垢を見ている連中がこれを見たらどう思うかな？　めちゃくちゃシコるんだろうな！」

「ひっ♡　んにゃあぁっ……♡」

膣内が大きくうねって、甘美な刺激が肉棒を包み込んだ。陽乃が身をよじる時、肉粒が敷き詰められた膣壁を竿が擦る感覚に、剛毅の背筋に快感が押し寄せてくる。

「義理の息子に犯されてイキまくってるとこ……みんなに見てもらおうぜ！」

「いっ……やぁ……♡　く……おぁっ……わた、し……わたひぃ……♡　ひぎぃ……っくの……イクの……♡　とまりゃ……ない……♡」

「いやらしいおっぱい揺らして……みんなにシコシコしてもらえ！　この淫乱！」

「あっ♡　ああっっ♡　はっ、らめ……れす……らめぇっ……♡　わたし……おか、おかひっ……♡　おかしくな……んんぐっ♡　はあっ……くはっ♡　んおおぉぉっ～～～……♡♡♡」

狂ったような嗚咽が届いて、剛毅の射精中枢に鈍い衝撃が走る。堪えようのない快感に開き直って激しく腰を使った。

熱く濡れた肉ヒダがこれ以上ないくらい吸いついてくる。

限界寸前の肉棒を引き抜くと、素早くコンドームを外して発射口を彼女のイキ顔に向けた。

「ぐっ、ほらっ、口開けて……受け止めろ！」

「あっ♡　ひはあぁっ……♡」

イキまくってるせいで、既にバカみたいに大口を開けていた陽乃の美しい顔に、精液を浴びせる。勢いよく噴き出した白濁液が無防備な顔を汚した。

「あぁっ……かはっ♡　はぁ、はぁ……んむ、ふはぁ、んんぁ……♡　どろっとしたの……いっぱい……♡」

（他人に見せるわけにはいかないが……脅しの材料にはなるな）

垂涎ものの痴態に、剛毅はまたシャッターを切る。

後で冷静になった彼女を黙らせるのに利用できるはずだ。

「ほら綺麗にしてよ、陽乃さん」

「ん……れろぉ♡　ぴちゃ、ちゅぶ♡　は……あむっ♡」

口元にドロドロの肉棒を近づけると自然に舌を出して、驚くほど丁寧に亀頭を舐め始めた。カリ首の溝や裏筋まで細かく舌を這わせ、唇を吸いつけて尿道に残った精液まで啜りだす。

そのあまりにも淫らな姿に再び下半身を熱くしながら、スマホの容量を圧迫するほど何度もシャッターを切った。

そしてお互いの理性の容量を圧迫するほど何度も彼女を犯すのだった。

「今日撮った写真を誰かに見せられたくなかったら……わかりますよね？」

最後に撮影した写真の陽乃は、全身が汗やら精液やらでドロドロ、さらに至る所に使用済みのコンドームを張り付けており、その姿はまるで輪姦された後のようだ。

どんな事情があれ、このような写真が世に出回った先に陽乃を待つのは破滅である。

「これからよろしくね……義母(かあ)さん」

いつかは『母』と呼んでほしかったが、こんなタイミングで、親子とは一番遠い関係になってしまってから呼ばれるとは何とも皮肉な話である。

魔が差したとはいえ、母や妻であることよりも女であることを選んでしまった報いでもあった。

【第二話　陽乃バニー】

剛毅に犯されたあの日から、少しずつ陽乃の態度は変わっていった。

最初の数日こそ、怯えたような様子で剛毅に犯されることに抵抗を見せていたが、だんだんそれも鳴りを潜め、今では従順になって日常から笑顔まで向けるようになっている。

単純な諦めというよりも毒を食らわば皿までもとでも言うべきか、開き直ったように剛毅には思えた。

父親からはぎこちなかった陽乃との関係が良好になったように見えるらしく、基本的に仏頂面の彼が、顔をほころばせる姿をよく見るようになった。

再婚の話を事後報告してくるくらい、剛毅と父親の関係は良好とは言い難かったが、さりとて憎み合っているわけではない。

自分が働かずにいられるのは父親のおかげであることも、実の母親がいなくなった時に彼が自分と同じくらいには傷ついていたであろうことも理解していた。

父親を裏切って陽乃を抱いていることに関して、全く良心の呵責がないわけでもない。

しかし、それ以上に彼女との関係は必要悪であるとも思っていた。

このまま満たされない生活が続いていれば、陽乃が他の男に走るのは時間の問題だった。貞淑な妻を演じるには彼女は淫乱すぎたし、二人の娘を育てるために長年それを抑え込んできた反動も大きい。

計画のためには過激なプレイも必要だった。

「……本当に動画撮るんですか？　ここで……？」

ドスケベの具現化といえる黒いバニースーツ姿の陽乃が、顔を真っ赤にしながら腕を組んで胸元を隠している。寄せられて腕からこぼれそうな爆乳が、余計にエロさを引き出していた。

「そんなスケベなコスプレしておいて今更でしょう？」

「それはそうですけど……せめて剛毅さんの部屋でしませんか？」

ハメ撮り自体は問題にしていないあたり、陽乃もすっかり染まっていた。

「ここでヤルから意味があるんですよ。夫婦の寝室ですることに……」

今日から父親は出張で家を留守にしていた。すでに家のあらゆる場所で行為に及んでいた二人

だったが、この部屋でだけはしたことがなかったのだ。

「今回のは俺と陽乃さんしか観ないから平気ですってば……」

最初に犯した日も含め、行為の写真は度々裏垢のほうでアップしていた。もちろん顔が映らないようにするなど、身元がバレないように細心の注意は払っている。

剛毅としてはリスクを避けたいところだったが、陽乃が内心ノリノリなのは察していた。無理に抑え込んで勝手にアップされるよりは、自分で管理したほうがまだ安全だと思っての行動である。それに少しマゾ気質のある陽乃は命令されているほうが悦ぶのだ。

もちろん剛毅自身の欲望も多少なりとも含んではいた。

「ヤリたくてたまんない……早く、ほら」

「あっ……♡　もうこんなになって……♡」

渋っているように見える陽乃の手を取って、強引にガチガチに勃起した肉棒を触らせた。数秒は補助してやるが、それ以降は布越しに感じる肉棒の熱が伝播したのか、自ら擦ったり摘まんだりするようになる。

これは行為の前のルーチンとなりつつあった。陽乃のスケベスイッチを入れるための儀式である。

「あぁ……♡　すりすり♡　すりすり♡　はふ♡　んむっ♡　早くおしゃぶりしたいです♡」

命じるまでもなく勝手に跪いて雄の膨らみに頬擦りまでし始めた。たぷんたぷんとJカップの爆乳を揺らしながら、布地の上から唇を吸いつけてアピールを欠かさない。

「はむ♡　ちゅむ♡　ふぅ……もう撮ってるんですか？」

「ああ、もう回ってるよ。それじゃあ……まずは手を使わずに布越しでフェラしてもらおうか発情バニーちゃん♪」

「ふぅっ♡　んはぁ……はい♡」

剛毅の太腿を摩りながら、布地越しの肉棒に舌を這わせた。ゆっくり、じっくりと大きく舌を使って裏筋を刺激する。だんだんグレーの布地が唾液のせいで濃い色に染まっていく。

「はっ、パンツドロドロにされちゃうな……」

「はふぁ♡　ちゅぶ、れろ♡　れろんちゅ、ぴちゃ、ぴちゃ♡　んっ、ごめんなさい♡　ちゃん

と洗濯しますからぁ……♡　あむちゅぱ♡　ちゅるちゅる……♡」

下着から飛び出そうになっている亀頭の部分を、ぬるぬるの唾液たっぷりの唇で包み込み、舌先でチロチロとくすぐる。どっと先走りの汁が溢れてくるのを舌で感じて、陽乃のあそこからも蜜が滲んできた。

「ふはぁ♡　んちゅ……あ、あの……そろそろ……♡」

「もう我慢できなくなったの？　……じゃあ、よし」

まるで飼い犬みたいな扱いだったが、陽乃は気にすることもなく、手を使わないという条件を器用に満たして下着をずりおろす。

「あはあっ……♡　おちんぽバキバキです♡」

彼女の期待通りにたくましく屹立した肉棒が、眼前に勢いよく躍り出た。粘ついたカウパーで濡れた亀頭が鈍い光沢を放っており、彼女の目を惹きつける。

「カメラ目線でご奉仕してもらおうか」

「はい……♡」

まずは上目遣いで先っぽに口づけをしてご挨拶。それから竿全体に唾液を塗りたくるように舐めまわす。肉棒がピクリと震えると陽乃の膣内も同調するようにキュンとした。

「へあ♡　ちゅぷ♡　ちゅむる♡　はぷ♡　んっ、亀頭がパンパンに膨らんで……♡　はぢゅる、ふぅ♡　ふぉってもえっひです……♡」

手持ちぶさたの両手で自らの爆乳を揉みしだきながら、蛇のように細かく舌を使い丹念に亀頭を刺激する。膨張して威嚇する亀頭にドキドキして、おっぱいを触る手にも力がこもった。黒いバニースーツ越しに爆乳がいやらしく歪む様子は、剛毅の興奮を煽って肉棒をさらに硬くさせる。

「旦那のちんぽとどっちがいいんだ？」

せっかくの動画ということもあって寝取られの定番セリフを吐いてみる。

言ってみてから陳腐なセリフの恥ずかしさに顔を手で覆いたくなった。

「はぁ♡　ふぅ……あなたの……あなたのおちんぽ♡　あなたのおちんぽのほうが好きです♡　ちゅぷ♡　れろれろ♡　んふぁ……あの人はあまり……大きくないし……れちゅ♡　ぴちょ、はぷじゅ♡　それに、たくさんシてくれないから……女として自信がなくなってしまうんです……」

（もうちょい躊躇しろよ！　てかちんぽをしゃぶりながらめちゃくちゃぶっちゃけてきたな……

親父も歳だし回数は仕方ないだろうよ）

心の中でツッコミを入れて父親を不憫に思う一方で、歪んだ優越感を覚えてもいた。

陽乃もこのような残酷な言葉を漏らしながらも夫を愛していた。

矛盾を孕んだ感情がさらなる興奮を生み出しているのだ。

「はむちゅぱ♡　れろんちゅ♡　ほぉ、おっきい……このちんぽ大好きなんです♡　あむんっ♡　ぷぢゅ、んちゅ……ぐっぽぐっぽ♡　ぐっぽぐっぽ♡　むじゅ、にゅちゅっ、じゅぷるる♡」

剛毅をジッと見つめながら、亀頭にキスマークを付けるように唇を吸いつけて、リズミカルに竿をしごく。

蜜唾をたっぷり含んだ口内で舌をぐるんぐるんさせて奏でる水音が、夫婦の寝室を淫靡な空間に変貌させた。

淫乱な表情を隠そうともしなくなった陽乃の奉仕に、戦慄にも似た高揚感が彼の全身を駆け巡る。

もっと乱れた姿を記録してやりたい。

「そういえばあれを忘れてたな……」

「っはああぁん……♡」

持っていたのにすっかり存在を忘れていたリモコンのスイッチを入れる。

陽乃の股間にあらかじめ固定しておいたバイブがブルブルと震えだした。

スーツの上からでも振動の激しさがわかる。まるでピラニアが獲物の腹を食い破るように、膣内を掻き回して暴れていた。

「あんっ♡　くひぃ♡　い〝っ♡　いきな、り……あっ……はっ、はげしっ……んくぅ♡」

「こっちもしっかり頼むよ」

「くっひ♡　んあっ、くっ……は、はいぃ……♡　わか、りましたぁ……はむっ、ぢゅるるっ♡　んっ、ちゅろ、れろぉ、んぁぁ……んぶぅ♡　ぴちょ、ちゅる、うぅん……♡　んっ、あんぐっ♡　んぁむ、じゅぷるるぅぅ……♡」

がに股に開いた脚をぷるぷるさせながら、陽乃は奉仕を続行する。喘ぎ声で喉を鳴らしつつも、懸命に肉棒を飲み込んだ。

バイブの振動で余裕がなくなってきて、バキュームがより強くなっている。
狂ったように竿や亀頭に舌を絡め、唾液が白く泡立つほど激しく擦り上げる。
唇から白濁汁がダラダラと垂れて、いやらしく揺れる爆乳を濡らした。
「んあぁぁ♡　ぁぐぶ、んぢゅんぢゅ、ぬむっ、んんぐっ……♡」
喘ぎ声とバキューム音が入り混じった湿度の高い淫靡な響き。
男の熱が口の中を擦るたびに、下半身が疼いて仕方なかった。肉棒の代用品に膣壁を叩かれて、果汁を搾るように愛液が溢れてくる。
「くっ、いいぞ……もう出そうだ……！」
裏筋を舐る粘膜のざらつきが脳髄までも強烈に刺激した。腰にズキンと衝撃が走り、つま先から頭のてっぺんまで甘い痺れに支配される。
「んぶ、んっぶ♡　じゅるじゅる♡　ぁん♡　じゅっぽじゅっぽ♡　んぢゅぅちゅるるる～……♡」
咥え込んだ肉棒が弾ける寸前であることを察し、陽乃は喉を開いて受け入れる準備をする。

そしてカリに上唇を引っ掛けて、舌先で裏筋を磨くように刺激した。

これでフィニッシュだ。

「ぐっ……おぉっ……！」

「んんむ♡　むぐ、ふう゛っ……んぶふ～……っ♡」

陽乃の口いっぱいに濃厚な精液が吐き出された。噛まないと飲み干せないくらい濃い雄のエキスが粘膜を跳ね回る。

（イク♡　イク♡　イク♡　イク♡　イクぅ～～ッッッ♡♡♡）

射精とほぼ同時に陽乃も絶頂を迎える。

無慈悲なバイブの刺激と雄の圧力が組み合わさり、彼女の意識を真っ白な世界に飛ばした。

「んふぅ、んぅっ、くふぅ……んっ、むぐ♡　んん、ぶむっ……こくこくこく……ふぅ……んんっ♡」

「くっ……うぅ……吸い取られる……！」

噴き出した精液を、すっかり慣れた様子で器用に喉奥に流し込む。

飲まされた精液の分、身体から押し出されるように潮を噴き出し、カーペットにいやらしい水溜りができてしまった。

「盛大に潮吹きしましたね。親父が出張中でよかった……掃除が大変ですから」

（わたし……精液飲まされながらイってしまいました……♡）

「イキながらザーメンこぼさないのは感心ですね」

下半身を激しく痙攣させながらも、彼の腰にしがみついて肉棒から唇を離さない。

それどころか丁寧に根元までしごいて、自分の奉仕で吐き出された精液を余さず食道に導いていた。

（本当に飽きさせないよねこの人……こんな魅力的でエロい女と結婚してヤリまくらないなんて逆に親父すごくないか？）

陽乃の献身的な奉仕のおかげで、射精したばかりだというのに萎えることはない。むしろ、すっかり受け入れ態勢に入っているであろう彼女の膣内を今すぐにでも掻き回してやりたかった。

「待って……ください……」

ビデオカメラを置いて避妊具を用意しようとする剛毅に待ったがかかる。
「今日は着けないで……ナマで欲しいんです♡　その大丈夫だから……♡」
手を頭の後ろで組んで、脚を大きく開いたがに股のポーズ。いわゆるエロ蹲踞の姿勢で生ハメを懇願し始めた。
股間でうねるバイブの快感で小刻みに震えながら、愛液をだらしなく垂らすドスケベバニーガールの挑発に、剛毅は無意識に一度置いたカメラを手に取っていた。
「安全日だからって妊娠しないわけじゃないですよ？」
「それを言うならコンドームを着けていても絶対妊娠しないわけではないんですよ♪　それに昨日はあの人としましたから……♡　知ってますよね？」
「……さあ」
「どこにあるかまではわかりませんけど、視られてるの気付いてましたよ♡　そのおかげで昨日は珍しくいっぱい感じてしまいました……♡　あの人の精液でたぷんたぷん……というほどの量ではありませんけど、注いでもらいましたから……だから、大丈夫ですよ♡」

この女はデキたとしてもどっちの子供かわかりはしないから問題ないと言っているのだ。

最初に抱いていた印象からは想像することもできないような恐ろしい発言である。

陽乃の言葉の真意に戦慄しながらも、全身が沸騰したように熱くなるのを感じた。

義理の母親を犯した時点でリミッターは外れたと思っていた剛毅であったが、まだ最後の安全装置が残っていたのだ。

「はぁ♡　はぁ♡　早く……ください♡　あなたのナマおちんぽ♡　わたしの……ナカにください……♡　発情メスウサギに、たくさん、ズポズポしてください♡　あの人に負けないくらいナカ出しして、たくましいおちんぽで塗り替えて……あなたの女にしてください……♡」

発情した陽乃の淫語混じりの懇願。

無機質なバイブの振動音が室内に響く中、剛毅は自分の鼓動の音に急かされる。まるで全力疾走した後のように激しく動く心臓。

判断が遅い脳にお怒りのようだった。

（これだから女は碌なもんじゃない……）

大きく深呼吸した後に、ビデオカメラを置く。

両脚をぴくぴくさせて淫らなポーズを取っている陽乃をベッドに押し倒すと、網タイツを引き裂きハイレグをずらして蠢くバイブを一気に引き抜いた。

「んあぁ♡　ふあ……♡　キテください♡　ナマおちんぽ入れてください……♡」

ぐっしょり濡れた淫唇が誘うようにヒクついている。

欲しくて欲しくてたまらない。そう訴えている気さえした。

「んあっ、はいっ……て♡　んおぉぉ〜〜〜っ……♡」

挿入したというよりも吸い込まれたといったほうが正しいかもしれない。

先端部をあてがった瞬間、力を入れたわけでもないのに自然と肉棒が沈んでいったのだ。

（くっ、こんなに違うもんなのか……）

コンマ何ミリか化学物質の膜がないだけなのに、もたらされる快楽は段違いだ。

蕩けた肉ヒダがうねうねと肉棒に絡みつき、絶えず射精を催促していた。

（頭悪い奴がポコポコ子供作るのがわかるな。ナマのほうが絶対気持ちいいから家族計画も何も

あったもんじゃないだろう）

こうして脳内で毒づいてでもいないとすぐに射精してしまいそうだった。

まだ全然動いていないのにも関わらず凄まじい快感が剛毅を襲う。

何度かのセックスですっかり自分のカタチになっていると思っていた陽乃の膣内だったが、生挿入したことで真の意味で自分のカタチなろうとしていた。

「んっ♡　ふあぁ……っ♡　う、動いて……動いてください♡　はっ♡　くっ、んぅ、焦らさないで……♡」

腰を艶めかしく揺すって、抽挿を催促する陽乃。膣内の締め付けも心なしかきつくなる。

このまま主導権を握られることだけはあってはならない。

陽乃の膣内に馴染んできたのを見計らって、腰を動かし始めた。

「このドスケベめ……！」

男としてのプライドが射精欲を凌駕した。

ゆっくりと腰を上げると、亀頭がギリギリ抜けないくらいに膣内から肉棒を引き抜いていく。

肉ヒダが甘くまとわりつき、膣壁全体を引っ張り上げるような感覚が亀頭に重くのしかかる。
思わず涎を垂らしたくなるような刺激と快感が剛毅の下半身を駆け巡った。
「や……やあ♡　ぬけ……ちゃ……んあっ♡　あぁ……あっ、びいっ……♡」
切なそうな陽乃の声色。腰を浮かせて抜かないで欲しいとアピールしてくる。
支配者は誰なのかハッキリさせなくてはならない。
腰を上げた姿勢から全体重を乗せて、子宮口まで叩きつけるように乱暴に挿入すると、陽乃は喉が張り裂けそうなくらい嬌声を上げ、雌穴を強く締め上げた。
瞬間瞬間に込み上げる射精欲をプライドで黙らせながら、執拗に、乱暴に、膣内を何度も貫く。
腰をぶつけるたびにスーツからまろびでた爆乳が引きちぎれそうなくらい激しく揺れた。
この夫婦の寝室で、真の主は誰なのかこの女にわからせてやらなくてはならない。
それは彼女の望みでもある。
「はっ、あんっ♡　やあっ……それ、しゅご……いっ♡　おちんぽっ♡　ゴリゴリって……♡」
愛蜜で満たされた陽乃の肉壺は、蕩けるような快楽で肉棒を包み込んでくる。

柔らかくもきつく締め付けてくる義母の生膣の感触に、剛毅は交尾を覚えたての猿のように夢中になって腰を振りまくった。

（これじゃあ……俺がケダモノみたいじゃないか……？　一番欲しがってんのはあんただろうがっ！　モーレツ発情バニーちゃんめが！）

鋼のように硬くなった肉棒を根元までずっぷり沈めると、陽乃の両腕を引っ張って抱え上げる。

そのまま剛毅が横になることで位置が逆転し、体位を正常位から騎乗位へと強引に変えてやった。

「ほら、たまには自分で腰を振ってみなよ」

「あんっ♡　こんな……こんな上になるなんて、恥ずかしいです♡」

そう言いながらも小刻みに腰がぴょんぴょん跳ねている。

実のところ今までも騎乗位を恥ずかしがる様子はあった。

しかし、下品なエロ蹲踞ポーズを決めて、義理の息子に生ハメや膣内射精を懇願した女が、上になったくらいで恥ずかしがるのは滑稽である。

皮肉の一つでも言ってやろうかと思ったが、断念せざるを得なかった。

孕みスイッチが入った淫乱義母ウサギが本能の赴くままに乱れ始めて、彼の余裕が消え失せたからだ。

「はうんっ♡　おぉっ、きいっ……のっ♡　子宮ぐりぐりって……♡　くはぁ、あぁん……♡」

子宮口と亀頭を密着させてぐりんぐりんと円を描くような腰使い。

ベッドに捻じ込まれてしまいそうな激しさだ。ベッドの軋む音も、剛毅が上だった時より大きかった。

亀頭に執念深く吸いついてくる子宮口と、竿全体に貪欲にまとわりつく肉ヒダが、射精欲を猛然と煽ってくる。

「ぐくっ……おらっ！　もっと、もっとぴょんぴょんしろ！　恥知らずの淫乱雌ウサギめが！」

「はぁ……♡　はぅ……♡　んっ、はい……♡　んおぉっ♡　おぐぅ……とどいてます♡　んふぅ♡　はぁっ、あなたの……ぶっとい、ニンジン……んおぉっ♡　かっ、あはぁっ♡」

ヤケクソ気味に命じると今度は結合部がしっかり見えるように開脚して跳ねるように腰を打ち

付ける。Ｊカップの爆乳がその重量を見せつけるように、ぶるんぶるんとアグレッシブに揺れまくっていた。

「んぐっ……くっ、ドスケベに揺らしやがって……ほら、自分でデカパイ舐めてみろ！　できんだろ！」

「んふぅ♡　はい……♡　はぅ、んくっ……できますよ……♡　はぶちゅ♡　くちゅ、れろちゅ♡　れろぉ、むちゅ、ぢゅぱぁ……♡」

両手でおっぱいを抱えると乳首に唇を吸いつける。

初めて見るセルフパイ舐めに剛毅も興奮を隠しきれない。

「んぶちゅ♡　んはぁ♡　これ……とってもエッチですね……♡」

「腰も……止めるな……！」

「わかってます♡　んっ♡　おっ、ほっ♡　ちゅぱ♡　れぢゅ♡　ふ……っおぉっ♡」

セルフパイ舐めをしながら、杭打ちするように激しく腰を使う陽乃。彼女が動きやすいように足首を掴んでやりながら、剛毅は歯を食いしばって射精を堪える。

「はぉ、んぉぐっ♡　おっぱい……っらめぇ……♡」

膣内の締め付けが一段ときつくなる。

剛毅の目の前がチカチカと明滅する。

ほとんど無意識に陽乃のおっぱいを鷲掴みにしていた。唾液でべちゃべちゃになったいやらしい爆乳が大きく形を変える。

痛みと陶酔が一緒にやってきた彼女は大きく背中を反らしながら、突きあげてくる衝動を一身に受けていた。

「ふあっ♡　んぎっ♡　わた、わたし……もう……いぃっ♡　はっ♡　イキ……そうですっ♡　んあぁぁぁっ……♡」

背徳的な関係から生み出された、淫臭しかないベッドの上。肉と肉が激しくぶつかり合う音、鈍い水音、義母の喘ぎ声がミックスした夫婦の寝室。

本能の赴くままに繰り広げられる彼女の腰振りに没頭していると、抗いがたい射精衝動が訪れた。

「はぅっ♡　んん♡　おちんぽ、イキそう……なんですね？　くっ、ふぅ♡　あいっ♡　いっしょ……いっしょに……っっ♡」

「うっ……！　あ、ぐっ、出るっ！」

「イ……ク……♡　イクっ♡　いぎっ、んんっ♡　やあぁっ♡　んふあぁぁぁぁっ……♡」

ほんの一瞬、まるで時が止まったかのような静寂の後、激流のような快感が二人を包み込んだ。

男は脳天まで貫通しそうな勢いで射精し、女は吐き出された精を余すことなく強欲に吸い尽くした。

彼女の蜜と彼の樹液が混ざりあって、ドロリと流れ落ちてくる。白く濁ったそれはまるで二人の繋がりが断たれぬように塗られた接着剤だった。

脱力した陽乃がゆっくりともたれかかる。抵抗なく、自然な感じで、愛する者にするように。

汗ばんだ豊満な肉が雄の身体に溶けてひとつになる。

「はぁ、はぁ……あったかいの……わたしのナカで……広がってます……♡」

お互いに荒い呼吸のまま舌を絡ませ合う。食べ合うように、ぐちゃぐちゃに、深いつながりを求め合った。

塗り替えられてしまった彼女はもう元に戻れない。